



ボトルネックを壊して

永田円了

Breaking The Bottleneck

ボトルネックとは、瓶の首のこと。瓶の首は細長く、中身が一度に出てこない。瓶の中身が満タンだったとしても、瓶の首が細ければ逆さに降っても一度には出てこない。それから転じて、ボトルネックは仕事や作業のスムーズな進行が妨げられた状態、障害、渋滞が起きていることを意味する。もしこのネック（障壁）を壊すことができれば、何が起ころのか。次の二つの事例から検証したい。

動物園の変容

危機にあった旭山動物園が、年間 26 万人（1995 年）から、年間 300 万人（2009 年）に劇的に入園者数を伸ばすことができたのは何故か。そこには、前園長・小菅正夫氏の斬新な発想と自由なリーダーシップの存在があった。

1967 年、北海道旭川市立動物園として開園した旭山動物園、全国的な動物園ブームのもと繁栄した。日本中が高度経済成長に沸いていた頃である。しかし 1980 年代に入ると、入園者数に翳りが見え始める。心配した市役所は、メリーゴーランドや豆列車などの遊具を取り入れた。一時的に入園者数は増えたものの、翌年からは減少の一途をたどった。

危機感をもった市役所は、動物にショーをやらせては、と提案した。園長はその提案をはねつけた。本質でない改革案は受け入れることできなかったのである。野生動物には本来の姿がある。その姿を見てもらうことが動物園の役割であると主張した。



小菅流のリーダーシップはユニークなものだった。各飼育係が“ワンポイントガイド”をする、というプロジェクトを立ち上げた。やり方は個人の裁量に任せた。彼らの中に口下手の飼育員、坂東元さんがいた。彼が行ったユニークな赤鼻熊のガイドが、後の「行動展示」の発想に繋がった。

動物をありのままに見せる「行動展示」、全国から入園者が集まった。動物の個性に合わせた環境をつくることで、動物は生き生きと行動する。

アザラシには、垂直の水槽を、手長猿には、間隔をおいた出っ張りを作った。普通の水槽、普通の檻の中に閉じ込められていた動物たちが、動物らしい感性を発揮できる空間が与えられると、生まれ変わったように生き生きし始めた。入園者の反応は、今までの“カワイイ”から“スゴイ！”に変わった。動物園の役割認識を変えることによって、ボトルネックが壊れ、動物のもっている可能性が解放されたのである。

体重 103 キロの幸せ大逆転

太っている女性はダメな人間だ、痩せないとなんにも幸せにはなれない。体重 103 キロの羽林由鶴さんは幼いころからそのように自分を否定する考えを持ち続けていた。

ある時、この意識のボトルネックが壊れる出来事が起こる。病気で入院中の由鶴さんを父親が見舞った。その時の父のコトバがネックを壊す力になった。「これからの人生、おまけだと思って、おまえの好きにやれよ！」

太っているとか言っていること自体が、大したことはない。また、死にかけた体験を笑いながら話す同室の患者と接することで、一挙に人生の見方に変容が生まれた。

現在は幸せな結婚生活をする傍ら、婚活カウンセラーとして、悩み多き若者たちの相談にのっている。

<事例 DVD 等>

北海道 旭山動物園 / 危機に目覚める、前園長・小菅正夫
ワンポイントガイド / 理想のリーダー像
坂東元園長 / 行動展示を / 野生の本質を生かして
お客に、動物本来の姿を見せる / カワイイからスゴイ！に
NHK スイッチインタビュー 「山本寛斎×坂東元」

逆転人生「体重 103 キロの幸せ大逆転」羽林由鶴
意識のボトルネックを壊して、大逆転
父のコトバ / 人生おまけ、お前の好きに生きろ

歌・松田聖子「赤いスイートピー」♪ あなたの生き方が好き ♪

